

総合力で対応する/ Emergency/ Intensive Care Medicine

特集にあたって

本特集号は守備範囲の広い内科医がさまざまな状況で初期対応を求められたときを想定して企画しました。内科疾患のバリエーションはとても豊富ですので、救急外来では馴染みのない愁訴への対応が求められたり、病棟急変では経験の少ない疾患に対応しなければならなかったりするかもしれません。

対応に不安を感じた際にやるべきことは応援を要請することなのですが、そのアクセスは状況によって異なります。本特集号がその応援が来るまでに患者を安定化させるためのヒントとなり、担当医の安心感につながるようなものになればと思います。

そのための工夫として、以下の二点を挙げたいと思います。最初の一点は、診断がはっきりしていない場合の対応を念頭に置いた症候別の項目と、馴染みのない疾患への対応を想定した疾患別の項目を挙げました。これによって、どのような状況でも最初の一步が踏み出せるようになっていきます。もう一点は、専門外の医師にとっては人生で一度遭遇するかどうかという稀な疾患の対応を挙げました。教科書でも記載が多くなく、資料を探そうとしても探しにくい疾患にページを割くのは意義がある一方で、売上を気にする雑誌媒体では異例のことです。多くの人が頻繁に使う項目にはなりません、いざというときの対応として生涯にわたってそばに置いておけるものになったのではないのでしょうか。

この特集を組むにあたって上記のようなわがままを聞いてくださった編集部・編集委員のみなさま、魅力ある原稿をくださった執筆者のみなさまに厚く御礼申し上げ、本特集号によって現場の苦悩が少しでも解消されることを祈っております。



東京ベイ・浦安市川医療センター救命救急センター 船越 拓